

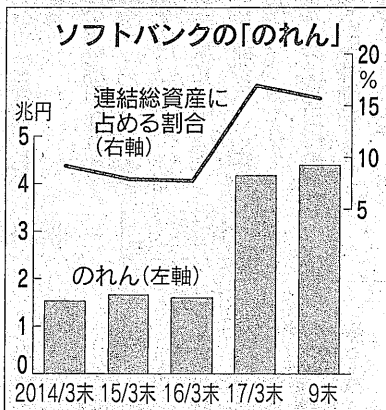
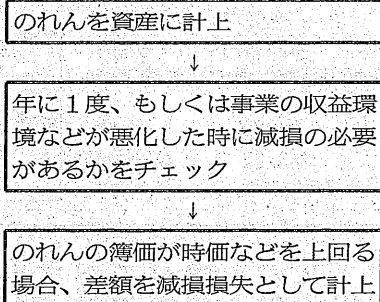
驚れる監査法人

現場が取り組む課題 ④

「日本、いや世界で最 ディングスの買収では2 も複雑な財務諸表かもし ・9兆円(9月末)とい れない」。トーマツ幹部 う巨額の「のれん」が注 がこう形容する担当企業 目を集めた。のれんとは がある。それは大型M& 買収価格と純資産の差を A(合併・買収)を繰り 示す。それが膨らむのは、 返し、姿が大きく変わり ソフトバンクはアームが 続けるソフトバンク 将来、大きな価値を生み ーだ。担当会計士は当 出すと考えているから 然、エース級を送り込ん ている。

担当会計士を悩ませる 原因の一つはソフトバン だ。ソフトバンクののれ クの資産評価だ。英半導 んは9月末で計4兆39 体設計、アーム・ホール 00億円と総資産全体の

のれんの減損の流れ(IFRS)



将来性の目利き力必要に

ソフトバンク、買収で「のれん」膨張

16%を占める。だが、すべてのビジネスの甘さが巨額の減損につながる可能性もある。「のれんはできるだけ保守的に評価したい」(あるベテラン会計士)。リスクまでも孫会長兼社長が年2回ほど、会計士に経営の現状を説明してきた。入らないといけない」と注文を付ける。

だ。「(あらゆるモノがネットにつながる)IoTが不可欠との判断だ。ソフトバンクで孫会長が普及すれば、このくらいの上高と利益は出る」。孫正義会長兼社長は本社の会議室でアームの成長性について熱弁を振った。面談相手は投資家ではなく、トーマツの担当会計士だ。実はソフトバンクは昨年のアーム買収では、孫会長兼社長とトーマツの担当会計士の面談を年4回程度に増やした。これまでも孫会長兼社長が年2回ほど、会計士に経営の現状を説明してきた。入らないといけない」と注文を付ける。

会計士の理解を得るには、買収した事業の将来性をどう評価するのか。ソフトバンクを担当するトーマツだけの問題ではない。日本企業による巨額買収の事例は増える一方だ。2017年3月期に東芝は買収した米原子力事業で7316億円の減損損失を計上した。買収先の経営を目利きする力も必要になってくる。

君和田氏は「会計士は過去のことを見るのは得意だが、将来の見積もりは不得意」と指摘する。担当企業側から投げられるのか。監査法人が抱える課題は大きい。